

多文化共生教育としての多言語カルタⅡ —外国にルーツのある児童が多数在籍する学校の授業実践から—

道下 あかね

東大阪市立枚岡西小学校

1. 実践の背景

筆者が勤務する A 市立 B 小学校には、全学年に外国にルーツをもつ児童が在籍している。令和 6 年度現在、児童の出身国・地域は韓国・朝鮮、中国、フィリピン、インドネシア、ベトナム、アメリカ、ジャマイカ、カナダと多岐にわたる。中には、授業内での抽出による日本語指導を必要とする児童もあり、教室内では日常的に多文化的な背景が存在している。

しかしながら、こうした実態については、児童のみならず、該当児童の担当教員以外の教員にも十分に共有されているとは言い難い。日本語指導は限られた教員、外部の母語通訳者等に依存している現状がある。そこで、特定の支援者に任せるのではなく、学校全体で多文化共生教育を推進していく必要性を強く感じた。

この考えの根拠として、中央教育審議会（2005）は「ものごとの規模が国家の枠組みを越え地球規模で拡大し、国際的相互依存関係の中で生きる現代人には、一人一人が、国際関係や異文化を単に理解するだけでなく、国際社会の一員としての責任を自覚し、どのように生きていくかという点を一層強く意識する必要がある。求められているのは、個人が相互理解に基づく多文化共生という視点を持ち、国家の枠組みを超えた国際社会の一員として自己を確立し、発信を行い、主体的に行動できる人材である。」と述べている。このような提言を出発点とし、地域の学校教育においても、多文化共生の視点を踏まえた実践の必要性が高まっている。

全国的にも、外国にルーツをもつ児童生徒の数は年々増加しており、これからの社会を見据えると、多文化共生を推進するための教育、すなわち多文化共生教育を学校教育の中核に据えていくことが急務であると考ええる。

そのような中、筆者は英語指導加配専科教員として、外国語活動および外国語科の授業を担当してきた。その日々の実践の中で、児童が多文化共生をより身近に感じるきっかけとなったのが、前年度より継続して取り組んでいる「多言語カルタ」の活用であった。

本校には外国にルーツをもつ児童が多数在籍しているにもかかわらず、本実践以前は、互いの背景を知らない児童も多かった。「多言語カルタ」という身近な教材を用いた授業を通じて、まずは小学校高学年段階において、さまざまな国や地域につながる人々と共に生きるためには何が必要なのかを児童一人ひとりが主体的に考えることを目指した。

2.1 多言語カルタとは

道下（2024）は、「多言語カルタとは、所属する学校の子どもたちにとってルーツのある国・地域につながる言語で構成されており、3つ以上（辞書的には“複数”）の言語を含むものである。また、各学校によって使用する言語は異なる」と定義している。

本校には先述のとおり、複数の国や地域にルーツをもつ児童が在籍している。授業で使った多言語カルタは、表面にイラストを描き、裏面には該当する言語（ハングル、英語、ベトナム語など）で単語を記載し、ユニバーサルデザインを意識して作成されたものである。

A市ではこれまで、ハングルカルタを活用した多文化共生教育が行われてきた。しかし筆者は、それだけでは十分でないと考えた。道下（2024）は、ハングルカルタと多言語カルタの共通点と相違点について次のように述べている。

「共通点としては、個々人のアイデンティティを尊重していること、カルタという遊びを通して楽しみながら参加できる点がある。一方、相違点として、ハングルカルタは在日韓国・朝鮮人を対象の出発点としているが、多言語カルタはすべてのルーツをもつ子どもたちを対象としている。また、ハングルカルタは“野菜（サンチュ）”“ハングル（ソゴ）”“人物”“山河”といったジャンルに韓国・朝鮮文化に関わるものが多い。」

また、多言語カルタについては、いわゆる出来上がったカルタを使用するのではなく、児童が1から作成し、オリジナルのカルタを作成するというのが重要となる。

2.2 実践の対象・実施時期

本研究では、多文化共生教育における学習指導案を作成し、2時間（各45分×2）の授業を実施した。授業後には、参加した児童および参観者を対象に、オンラインアンケートツールを用いた授業アンケートを実施した。

授業の対象は、A市立B小学校6年生の4クラス、計118名であり、児童からの回答は75名分であった。加えて、同校で授業を参観した教職員7名のうち3名から回答を得た。授業の実施時期は以下のとおりである。

多言語カルタ作成の授業：

- 令和7年2月5日（水）1～4時間目
- 令和7年2月18日（火）1時間目
- 令和7年3月4日（火）5時間目

多言語カルタ遊びの授業：

- 令和7年3月6日（木）4時間目
- 令和7年3月13日（木）4時間目

本校における多文化共生教育の中心的な取り組み対象は6年生であるが、6年生は中学校の

準備や卒業行事など、多忙な時期にある。そのため、多文化共生教育の前提として「他者との共生」に焦点を当てただけでなく、まず児童自身を深く見つめ直す時間が必要であると考えた。

本単元は、外国語科第6学年3学期の大単元「自分の夢を伝えよう」の一環として位置づけられており、児童は自分自身の振り返り（好きな教科、好きな食べ物など）を行ったうえで、自分の将来の夢や挑戦したいことについて考える活動を行った。

本活動では、高橋佳子（2013）の「千の願い」を活用し、「〇〇したい」という児童の願いを、日本語と英語で表現させるワークシートを用いた。児童はその願いをもとに職業を選び、それを多言語カルタの語彙として活用した。これにより、児童にとってカルタの内容がより身近なものとなり、次の小単元（Lesson 7: “I want to join the brass band.”）へのスムーズな接続も図ることができた。

2.3 単元名・単元目標・単元計画

単元名：Lesson 6 “I want to be a singer.”（Crown Jr. 6：三省堂）

単元の目標：互いの願いや夢を知り、卒業後も互いを応援し合い、支え合うために、何をしたいのか、どんなことができるのかを英語で伝えることができる。また、世界のさまざまな職業やその言語的背景について知ること、多文化共生について主体的に考えることができる。

単元設定の理由：本単元は、大単元「将来の夢を友だちと伝え合い、応援し合う」の一部である。児童が将来の職業を考えるにあたり、まずは自己理解を深める時間を設け、自分自身について改めて振り返ることを出発点とした。

単元計画一覧

時	主題	学習活動（子どもの活動）
1	職業の言い方を知ろう。	・ 職業の言い方を知る。・ 職業ビンゴをする。
2	職業や、その職業についている人について伝え合おう。（Lesson6-1）	・ 職業チャンツ ・ 英語でやりとり ・ Let's Watch ・ Let's Listen
3	つきたい職業とその理由を伝えよう。（Lesson6-2）	・ 職業チャンツ ・ 英語でやりとり ・ Let's Watch ・ Let's Listen
4	その職業についたらどんなことがしたいかを伝え合おう。（Lesson6-3）	・ 職業チャンツ ・ 英語でやりとり ・ Let's Watch ・ Let's Listen
5	自分ワークに取り組もう。	・ 自分ワーク ・ 願いのリスト選び ・ 自分ワーク交流 ・ 自分ワークのふりかえり
6	多言語カルタ（職業編）を作成しよう。	・ 職業ランキングクイズ ・ 英語でやりとり

		・多言語カルタ作成
7	多言語カルタ（職業編）で遊ぼう。	・多言語の発音練習 ・英語でやりとり ・多言語カルタ遊び
8	将来の夢をつたえあおう。(Step-up)	・Let's Listen & Read ・Let's Listen ・英語でやりとり ・単元のふりかえり

3. 本実践について 多文化共生教育授業における授業実践

3.1 多言語カルタ作成の授業

(1) 本時の目標

様々な職業名について、多言語を用いて正確に書くことができる。

自分について簡単な語句や文を用いて即興で伝えることができる。

(2) 展開（45分）

時間	学習活動	指導上の留意点
	○具体的な教育方法・学習活動を記入 ・予想される子どもの反応や思考の流れ等を記入する。	■教師の教育方法・支援 ○に関する留意事項を記入する。
Introduction 5min	○Greeting T: Hello, everyone. S: Hello, teacher. T: How are you? S: I'm fine. / I'm good. / I'm hungry. Pair S1: How are you? S2: I'm sleepy. How about you? S1: I'm so-so. Teacher asks for day, date and weather.	○Teacher make smile. Confirm the day, the date the weather quickly. (Keep standing, and Talk.)
Deployment (35min)	○Review The Work to Know Oneself! Remember previous time. Now we talk about "MY NAME" and "What food do you like?" First time, you	○前時に行った自分を知るワークを振り返り、まず自分の名前、好きな○○をペアで話す。その後、全体に話す。もし参観している教員がいたら、その教員にも入ってもらう。

Conclu sion (5min)	talk pair, second time all students and teacher. ○Review “What is the Root?” How about my elementary school students about Root? ○ Review “Meet the world in pictures.” S1: おぼえてる！くねくねした文字。 S2: 絵みたいな文字とか。 ○Occupation Rank Quiz Introduction rank 1 to 10. ○Let’s pronunciation. T: Last month you play “multilingual Karta” about fruits. Multilingual Karta. Example: idol 【Make Multilingual Karta】 T: Make 6 groups. Hand out paper. ○最後に今日のふりかえりを Forms に書いてください。多文化共生を意識して書けるといいなと思います。 (5minutes) Now listen. We will study “Play Multilingual Karta.” That all for today.	○小学校にルーツのある児童について確認するようにする。 ○3学期の最初に紹介した「世界とであうえほん」に言語のページがあったことに触れられるとよい。 ○2024.12 月に発表されたなりたい職業ランキングをクイズ形式で紹介。 ○各クラスに在籍する外国にルーツのある児童が活躍できるようにする。練習の際、時間があれば英語だけでなく、該当の言語（韓国・朝鮮語、中国語）では児童に発音してもらう。 ○1 班に 2 種類＝12 枚渡す。早く終わった人に読み札をかいってもらう。文字については、日本と似ているところ、違うところを意識しながら書くよう指導する。 万が一この時間で書ききれない場合でも、校内で今後も使用するため、丁寧に書くように伝える。 ○今日の学習の振り返りはオンラインアンケートツール（Forms）を使用して取り組む。時間の短縮でロイロノートに QR コードを送っておくようにする。 ■次回の連絡 次は多言語カルタの遊びになるので、時間のあ る人はロイロノートに送っている職業名のス
-----------------------------------	--	--

	That's all for today. See you!	ライドを復習して家で発音しておくように伝える。
--	--------------------------------	-------------------------

3.2 多言語カルタ遊びの授業

(1) 本時の目標

友だちが発言した言語材料の文と多言語について聞き取ることができる。

なりたい職業とその理由について、相手に伝わるように基本的な語句や表現を用いて話している。

(2) 展開 (45分)

時間	学習活動	指導上の留意点
	○具体的な教育方法・学習活動を記入 ・予想される子どもの反応や思考の流れ等を記入する。	■教師の教育方法・支援 ○に関する留意事項を記入する。
Introduction 5min	○Greeting T: Hello, everyone. S: Hello, Ms.Michishita./Ms.Linda T: How are you? S: I'm fine. / I'm good. / I'm hungry. Pair S1: How are you? S2: I'm sleepy. How about you? S1: I'm so-so. Teacher asks for day, date and weather.	○Teacher make smile. Confirm the day, the date the weather quickly. (Keep standing, and Talk.)
Deployment (35min)	○Review Remember previous time. Now we talk about "MY DREAM" and "The Reason." AT: What do you want to be? ET: I want to be a researcher. AT: Why? ET: I want to work at university someday.	○このレッスンで学んだ表現を使ってなりたい職業とその理由を会話する。もし参観している教員がいたら、その教員にも入ってもらう。いつもと同じペアだけではなく、違う人と話すように促す。また、なりたい職業がない人は I don't decide yet. ということを伝えているが、改めて確認するようにする。

First time, you talk pair, second time all students and teacher. ○Let's pronunciation. T: Last month you play "multilingual Karta" about fruits. 【Play Multilingual Karta】 T: Make 6 groups. Hand out cards. At first, ALT says Karta using "English." ■First time Practice. Other members say, "What do you want?" T ALT teacher says "I want to be occupasion's name." After that, take card! S: "What do you want to be?" T: "I want be a "cook", "cook." ■Second/Third time Choose 1 person. Read Karta. Raise your hand if you challenge. S1: 外国にルーツのある児童（2回目）OK! T: Other members take cards. S1 以外: S1: I want to be a "약사" "약사", "pharmacist"! (韓国・朝鮮語) T: Let's play Karta. (Play Karta) Now, let's you challenge! S2: I want to try! T: OK!	○先月別の項目のカルタ（果物編）で多言語カルタを経験し、思い出させる。練習の際、英語の部分は ALT に発音してもらうようにする。 ■1 回目は教員が行う。1 回目は英語一英語で言うようにする。（4～5 枚でチェンジ、2 回繰り返す） 児童が What do you want to be?と尋ね、教師が I want to be a~.と言う。 ■2 回目以降は児童が行う。 2 回目は外国にルーツのある児童が読み手を行う。 児童が What do you want to be?と尋ね、読み手の児童が I want to be a ○○▲.と言う。○○は日本語、英語以外の外国語で2 回、▲は英語で1 回言う。 英語以外の言語はこちらが指定するのではなく、児童に選んでもらうようにする。 * わからない単語がある場合の読み札の支援 児童が前で発音する際、わからない単語については読み札で確認して言ってよいこととする。
---	---

Conclu sion (5min)	S2 以外: “What do you want to be?” I want to be a “ pengemudi ” , “pengemudi”, “driver”. (インドネシア語) ○最後に多言語カルタで遊んだふりかえりと2回分の授業を通して考えたことを Forms に書いてください。多文化共生を意識して書けるといいなと思います。(5minutes) That's all for today. See you!	○今日の学習の振り返りはオンラインアンケートツール (Forms) を使用して取り組む。 時間の短縮でロイロノートに QR コードを送っておくようにする。 ■次回の連絡 次はパフォーマンステスト (〇〇したい、自分が選んだ職業、その理由) を行うことを伝える。
-----------------------------------	--	---

図 1 多言語カルタ (表面)



図 2 多言語カルタ (裏面)

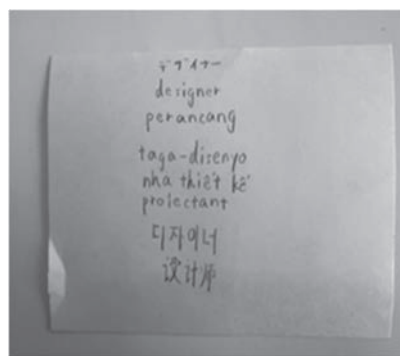


図 3 多言語カルタの読み札



4. 実践結果と考察

4.1 子どもの様子

カルタ作成時には、「はてなみたいな文字やdの上の棒を書くのが難しい。」と話す児童、「似ている文字がある」と異なる言語に共通点を見いだす児童もいた。

また、単語の定着度には個人差があり、「cartoonist」「architect」などの難しい単語を覚えていない児童もいたため、カルタを多く取れる児童とそうでない児童の間に差が見られた。1回目の「英語→英語」の出題時にはすぐに取りれる児童が多かったが、英語以外の外国語の発音を聞いてすぐには反応できず、英語での提示に変わってから「あ、〇〇か」と気づく児童も多かった。

4.2 多文化共生教育の授業を受けた児童のふりかえり

【カルタ作成時】

- ・難しい字が多かった。いろんな国の文字を書くのが難しかった。
- ・書くことで、自分で覚えることが増えた。
- ・いろんな国の言葉や文字の書き方が知れて、楽しかった。
- ・自分の国ではない言語にも触れたけれど、書くのが難しい字も多かった。でも英語と発音が似ている言葉もあって、言語ってとても面白いと思った。

【カルタ遊び時】

- ・楽しかった。英語じゃない言葉でも似た言葉で判別できたので、英語が上達しているのがわかった。
- ・覚えていたらすぐに手が出て、カルタが取れたときの爽快感がすごかった。
- ・英語ではない言語を聞いてもカルタが取れず、英語を聞いてからでないと分からなかったのが悔しかった。でも、いろんな言語を知れて楽しかった。
- ・聞き覚えのある言葉や、全く聞いたことのない言葉もあり、外国語って難しいなと思った。
- ・言語が学べてよかった。韓国語の中には英語に似た言葉があった。
- ・とても楽しかった！みんなで英語や他の国の言葉を聞いて「これちゃうん!?!」「それちゃうで！」と協力し合ってチーム戦でできて、とても楽しかった。難しい英語や韓国語など、いろんな国の言葉があって面白かった。
- ・勉強にもなるし、楽しかったのでまたやりたい。

【2時間を通して多文化共生について考えたこと】

- ・英検4級をとりたい。
- ・いろんな国の言葉を知ることができた。
- ・人に偏見を持たず、たくさんの人と仲良くなりたい。
- ・他の国の人とたくさん話して、お互いの文化の違いを尊重し合いたい。他国の文化を調べたり知ったりすることで、理解が深まると思った。
- ・またカルタを作って家族で遊びたい。
- ・難しいと感じた。

4.3 多文化共生教育の授業を受けた参観者のふりかえり

【A市立B小学校 スクールヘルパー C先生】

ある程度なじみのある職業を教師側が提示した点が良かったと思う。子どもたちが絵も文字も一から自分で書いて作ること、関心が高まり、意欲的に取り組んでいたように思う。特に文字に関しては、こうした機会がなければ書くことも少ないため、より身近に感じられたのではないかと。活動では、一度目は教師が英語で出題し、たくさん取れた子に他言語の発音を担当させるという流れがよかった。前に出た子どもたちも照れることなく、しっかりと発音していたのが印象的だった。外国語→英語の順で提示することで、定着がさらに促進されたと思う。子どもたちは非常に楽しそうに活動しており、楽しみながら多様な言語に触れられる意義深い

時間だった。

【A 市教育委員会 D 教諭】

この単元は、6 年間共に学んできた仲間とのつながりを大切にし、次のステップである中学校や、関わってきた先生方への感謝をこめて、思いや考えを表現する機会となっていた。外国にルーツを持つ仲間の言語に触れ、知ることは、言語の壁を超えて仲間への理解や共感につながる。多言語カルタの授業では、「新しいことを知った喜び」「日本語と外国語の違いへの気づき」「言語活動を通した協働意識」が見られた。間違えることを恐れず、楽しんで発音する姿、初めて聞いた職業の言い方に驚く姿が印象的だった。授業で触れた言語が身につくには時間がかかるが、学びに向かう姿勢があれば、将来的に学び直すきっかけとなるはず。今後は、英語の学習内容と多文化理解を横断的に捉え、総合的な学習や道徳で育む力と外国語で育てる力を整理する必要があると感じた。子どもたちの成長が楽しみである。笑顔あふれる素晴らしい授業だった。

【A 市立 B 小学校 校長 E】

多文化共生教育の中で「多言語カルタ」という教材を用いた先進的な実践を継続的に進めてこられました。授業もかなりブラッシュアップされており、今後のさらなる展開が楽しみです。今後、本校でも講師としての研修をお願いしたいと思います。ありがとうございました。

4.4 考察

令和 5 年度の実践では「野菜」をテーマに多言語カルタを作成したが、今回は「なりたい職業」を題材とした。その結果、子どもたちが将来の夢を共有し合う中で、異なる言語や文化的背景のある友だちの価値観や考え方に触れることができた。これにより、言語だけではなく、職業観や人生観の多様性にも気づくなど、多文化共生の理解を一層深める新たな発見があった。

一方、多文化共生教育におけるカリキュラムの点ではどうなのか。道下（2024）は「一部の教科や単発的な授業ではなく、教科横断型を意識した多文化共生教育のカリキュラムを模索していくことが、今後の課題である。」と指摘している。本実践では、先行研究の示唆を踏まえつつ、教科的観点を意識した取り組みを行ったが、カリキュラムの観点から明確になった点と、今後の課題として残った点があった。岡本ら（2011）は、「教科横断型のカリキュラムは、特定のテーマのもとに教科内容を交錯させるものであり、『共生』のようなテーマは、単発で終わらず次につながる一貫性が必要である」と述べている。今回、「将来の夢（なりたい職業）」というテーマを設定し、キャリア教育との関連づけを図ったことで、多文化共生の視点と児童自身の将来像を結びつける学びを生み出し、次の学びにつながる構成となった点は意義深い成果といえる。しかし、参観者の感想にもあったように、外国語科として「話すこと」の活動に十分な時間が取れなかった点は課題である。例

えば、カルタ作成の場面は図画工作科と連携し、制作時間を確保することも一案である。カルタを活用した遊びの２回目以降は「総合的な学習の時間」に位置づけるなど、教科横断型で柔軟に設計する必要がある。また、「自分ワーク」についての授業は本来、学級担任とともに年間計画の中に位置づけるべきものである。しかし、今回は担任の参観も４人中２人で、しかも短時間の見学にとどまった。これは学校全体の体制や学年の事情にも起因しており、今後の教員間の連携のあり方が課題となる。

５．結論

多文化共生教育を推進するうえで、年間計画の工夫と教員同士の連携は欠かせない要素である。短期間の授業や単発の取り組みだけでは限界があるため、年間を通じた計画的な実践が必要である。

そして、何より大切なのは、学校全体の教員が「多文化共生教育をどう実現するか」を継続的に考え続ける姿勢である。一人の努力ではなく、チームとして進めることで、多様性を尊重し共に生きる力を子どもたちに育てていくことができる。

６．参考文献

岡本智周・田中統治（2011）『共生と希望の教育学』筑波大学出版会 p.12 pp.14-15

酒井英樹（2024）『Crown Jr.6』三省堂

高橋佳子（2013）『１億総自己ベストの時代』三宝出版

道下あかね（2024）「多文化共生教育としての多言語カルタ ―外国にルーツのある児童が多数在籍する学校での授業実践から―」京都教育大学大学院連合教職実践研究科修士論文